

[特別寄稿・共同研究報告]

卒業後の動向および仕事・ 人生へ向きあう意識について

—学祖 長谷川良信先生の思想・理念に関する項目の統計的解析による検討—

川 瀬 良 美[※]

はじめに

社会福祉研究所は、平成25年度から新たな研究をスタートさせるにあたり淑徳大学が平成27年度に開学50周年を迎えることから、卒業生を対象としたアンケート調査「卒業後の動向および仕事・人生へ向きあう意識について」を実施することにした。その結果は、平成27年度「総合福祉研究 特集号『淑徳大学社会福祉研究所共同研究報告書—卒業後の動向および仕事・人生へ向きあう意識について—』」としてまとめて平成27年9月に刊行した。また、この結果については平成28年4月から期間限定であるが淑徳大学ホームページの社会福祉研究所のサイトで公開する予定である。

調査に御協力いただいた方はもちろんであるが、淑徳大学の関係者にご覧頂きたい。この調査結果が淑徳大学と卒業生をつなぎ、卒業生と大学の今後の発展に寄与できることを願っている。アンケート全体の結果については、ホームページをご覧頂きたい。

本報告は、学祖長谷川良信先生の思想・理念に関わる項目として設定した12項目について、統計的な検討によって卒業生が学祖の思想・理念についてどのように認識しているかの実態を明らかにすることが目的である。

I 調査計画

1. アンケート調査の目的と背景

アンケート調査は、淑徳大学が開学後の50年間に輩出した卒業生は、大学での学びをどのように生かして人生を構築しているかについての実態を明らかにすることを目的に、卒業生を対象に実施した。

※ 淑徳大学総合福祉学部実践心理学科教授 淑徳大学社会福祉研究所所長

調査では、大学での学びが卒業後の人生にどのように生かされているかについて、大学で取得した免許と職業生活の実態、仕事への意識、人生における価値への認識など人生観について、母校への帰属意識、同窓会活動・地方支部活動への参加状況などについて設問した調査用紙を作成した。特に仕事について感じていること、人生観および人生における価値の意識についてでは、学祖長谷川良信先生の理念や思想がどのように意識されているかに焦点をあてた。

2. アンケート調査の構成

2-1 アンケート調査用紙の構成

調査設問は、問1～問17で構成された。問1～問9までは基本的属性に関する項目で内容は、問1性別、問2年齢、問3卒業年（卒期）、問4卒業月、問5卒業した学部と学科、問6居住の都道府県名、問7淑徳大学同窓会の地方支部活動への参加の有無、問8同窓会支部活動参加者の所属支部の都道府県名、問9現在の就業の有無であった。これらの項目によって、回答者の基本的情報を得ることを目的とした。

実態調査項目としての問10から問17は、問10大学卒業後から現在に至るまでの職歴、問11大学在学中、あるいは大学卒業後に取得した免許・資格、問12現在の仕事について感じていること、問13人生観について：あなたが生きていく上での意識について、問14人生において重要だと考えることへの認識、問15母校である淑徳大学を誇りに思うこと、問16卒業生として、現在の淑徳大学への要望、問17卒業生として、これまでの経験、社会的立場や専門性を生かして淑徳大学に協力できること、であった。

2-2 学祖の思想・理念についての項目

学祖長谷川良信先生の思想・理念については、『長谷川良信全集』第1巻～第4巻（長谷川、2004）にまとめられている。第1巻と第2巻は、『長谷川良信選集』（1973）の上巻と下巻を所収し、第3巻は『長谷川良信遺稿』『随想随縁』および宗教、社会事業、教育についての各論説で、第4巻はブラジル開教活動、書簡およびその他の論説、解題、索引となっている。

また、これらの著作からその思想・理念をより分かり易く解説した啓発普及書として「トゥギャザー・ザ・ウェイ・ヒムー長谷川良信の生涯」（長谷川、1996）および「シリーズ 福祉に生きる 24長谷川良信」（長谷川、2005）がある。

本調査において学祖の思想・理念については、「トゥギャザー・ザ・ウェイ・ヒムー長谷川良信の生涯」（長谷川、1996）および「シリーズ 福祉に生きる 24長谷川良信」（長谷川、2005）を参考に学祖の思想・理念と考えられる記述を抜き出し、概念的に同一と考えられるものを整理して項目リストを作成した。それらの内容について長谷川良信の研究者として第一人者であり、両書の著者である長谷川匡俊大乗淑徳学園理事長に内容の妥当性についてご検討いただき、さらに加筆すべ

き事柄について助言を得た。

学祖の思想・理念の項目として選定された12項目（以下、学祖の項目）は、アンケート用紙の中で問12「現在の仕事について感じていること」（3項目）、問13「人生観について：生きて行く上での意識」（6項目）、そして問14「人生において重要だと考える事」（3項目）での3つの設問での質問項目に含まれた。回答方法は「思わない：1」から、「あまり思わない：2」、「どちらでもない：3」、「やや思う：4」そして「思う：5」までの5段階で考えて、自分の気持ちに最もあてはまる数値の一つを選んでもらった。

またアンケートでの基本的属性を問う設問のうち、本報告で対象とするのは男女の性別、卒業年、卒業した学部および学科、淑徳大学同窓会の地方支部活動への参加の有無、現在の就業の有無である。また、教育課程で設定されていて学祖の思想・理念を学ぶ機会となると考えられた「共生論」および「長谷川良信の思想と生涯」の履修の有無、さらに加えて年間数回開催されている宗教行事への参加の有無についても検討の対象とした。さらに本報告では、アンケートで設問された問15「母校である淑徳大学を誇りに思うこと」の10項目についても、学祖の項目との関連で検討する。

3. 「学祖の項目」内容

問12から問14までの質問内容は以下の通りであった。

問12「現在の仕事について感じていること」での質問内容

- 12-1 『他者とともに生きる』ことを意識して仕事をしている
- 12-2 仕事をする上で、周りの人に支えられていると思う
- 12-3 仕事をするときは常に相手のことを考えている

問13「人生観について」での質問内容

- 13-1 社会の一員として、支えられているという気持ちは強い方だと思う
- 13-2 社会制度だけでは支えきれないので、ボランティア精神を重視することが必要だと思う
- 13-3 社会を支えるのには、専門家と隣接領域の関係者が協働することが重要だと思う
- 13-4 与えられた命に感謝して生きる気持ちが強い方だと思う
- 13-5 社会の一員として使命感をもって生きたい、という気持ちが強い方だと思う
- 13-6 人間の本性は、本質的に『善』なる心性をもつと思う

問14「人生について重要なこと」での質問内容

- 14-1 一人ひとりが、自己実現を果たすことができるような社会づくりに貢献すること
- 14-2 全ての人が平等な、偏見のない社会づくりに貢献すること
- 14-3 利己主義ではなく、利他主義、共生の精神で生きること、

以上であった。

[illegible]

あったことから実質対象数は7,654名であった。学科別の人数は、社会福祉学科 延べ23期分で6,158名（内、有効発送数6,060名）、社会学科・人間社会学科延べ9期分で968名（内、有効発送数953名）、心理学科・実践心理学科延べ5期分で652名（内、有効発送数641名）であった。

5-2 回収率

有効発送数7,654通について、総返送回答数は1,202通で、回収率は15.7%であった。卒期別の回収率と、学科別の回収率は表5-2の通りであった。最も回収率が高かったのは卒期3期の30.1%で、それに続いて卒期1期と卒期7期が29.2%と3割近い回収率であった。全体の傾向として卒期1期から45期と進むに従って回収率が低下する傾向であった。

学科別の回収率は、社会福祉学科1,037通（17.1%）、社会学科・人間社会学科103通（10.8%）、心理学科・実践心理学科62通（9.7%）であった。社会福祉学科が最も高い回収率を示し、社会学科・人間社会学科、心理学科・実践心理学科と続いた。

表5-2 卒期・学科・卒期グループ別 回収率内訳

卒業年	卒業年度	卒期	全体			社会福祉学科			社会学科			心理学科			卒期グループ別			
			発送	返送	回収率%	発送	返送	回収率%	発送	返送	回収率%	発送	返送	回収率%	社会福祉学科	社会学科	心理学科	合計
昭和44年卒	43	1	48	14	29.2	48	14	29.2										
昭和46年卒	45	3	156	47	30.1	156	47	30.1							送付：696			送付：696
昭和48年卒	47	5	157	43	27.4	157	43	27.4							返送：172	0	0	返送：172
昭和50年卒	49	7	137	40	29.2	137	40	29.2							率：24.7%			率：24.7%
昭和52年卒	51	9	198	28	14.1	198	28	14.1										
昭和54年卒	53	11	300	62	20.7	300	62	20.7										
昭和56年卒	55	13	274	56	20.4	274	56	20.4							送付：1,110	0	0	送付：1,110
昭和58年卒	57	15	251	61	24.3	251	61	24.3							返送：238			返送：238
昭和60年卒	59	17	285	59	20.7	285	59	20.7							率：21.4%			率：21.4%
昭和62年卒	61	19	240	54	22.5	240	54	22.5										
平成元年卒	63	21	238	57	23.9	238	57	23.9							送付：1,344			送付：1,344
平成3年卒	2	23	303	53	17.5	303	53	17.5							返送：254	0	0	返送：254
平成5年卒	4	25	276	42	15.2	276	42	15.2							率：18.9%			率：18.9%
平成7年卒	6	27	287	48	16.7	287	48	16.7										
平成9年卒	8	29	371	53	14.3	284	36	12.7	87	17	19.5							
平成11年卒	10	31	398	63	15.8	288	54	18.8	110	9	8.2				送付：1,336	送付：435	0	送付：1,771
平成13年卒	12	33	485	67	13.8	358	54	15.1	127	13	10.2				返送：191	返送：51		返送：242
平成15年卒	14	35	517	59	11.4	406	47	11.6	111	12	10.8				率：14.3%	率：11.7%		率：13.7%
平成17年卒	16	37	551	71	12.9	317	44	13.9	126	15	11.9	108	12	11.1				
平成19年卒	18	39	552	48	8.7	313	36	11.5	120	9	7.5	119	3	2.5	送付：1,574	送付：518	送付：641	送付：2,733
平成21年卒	20	41	603	55	9.1	321	34	10.6	135	9	6.7	147	12	8.2	返送：173	返送：52	返送：61	返送：286
平成23年卒	22	43	529	53	10.0	315	24	7.6	88	15	17.0	126	14	11.1	率：11.0%	率：10.0%	率：9.5%	率：10.5%
平成25年卒	24	45	498	59	11.8	308	35	11.4	49	4	8.2	141	20	14.2				
未記入			未記入	10	0.1	未記入	9	0.9	未記入	0	0	未記入	1	0.2	6,060	953	641	7,654
全体			7,654	1,202	15.7%	6,060	1,037	17.1%	953	103	10.8%	641	62	9.7%				

注：表中では「社会学科・人間社会学科」をまとめて「社会学科」、また「心理学科・実践心理学科」を「心理学科」と表記した。

6. 回答者の属性別人数

以下の報告において、各設問ごとに回答者数が異なるのは、各設問毎の有効回答数を対象にして集計・分析したことによる。

6-1 回答者の性別人数

回答者の性別人数は、表 6-1 に示した通り、「女性」は804人（67.0%）、「男性」は396人（33.0%）であった。発送対象者の性別人数が明らかになっていないので発送数に対する性別回収率を検討することはできないが、女性の回答者が男性の2倍以上であった。

表 6-1 性別人数

性 別	件 数	比 率
男性	396	33.0%
女性	804	67.0%
合計	1,200	100.0%

6-2 卒期別人数

卒期別の人数は、10年毎にコード化し、卒期1期生～卒期9期生、卒期11期生～卒期17期生、卒期19期生～卒期27期生、卒期29期生～卒期35期生、卒期37期生～卒期45期生までとした。

結果は、表 6-2 に示した通り、「卒期37期生～卒期45期生」が286人（24.0%）で最も回答が多く、続いて、「卒期19期生～卒期27期生」が254人（21.3%）と続き、そして「卒期29期生～卒期35期生」が242人（20.3%）で3番目であった。発送数に対する回収率については、表 5-2 右欄を参照されたい。

表 6-2 卒期別（コード別）人数

卒期区分	件 数	比 率
卒期1期生～卒期9期生	172	14.4%
卒期11期生～卒期17期生	238	20.0%
卒期19期生～卒期27期生	254	21.3%
卒期29期生～卒期35期生	242	20.3%
卒期37期生～卒期45期生	286	24.0%
合 計	1,192	100.0%

6-3 学部別人数

学部別人数は、表 6-3 に示した通り「社会福祉学部」が785人（65.6%）で最も回答者が多く、続いて「社会学部」が270人（22.5%）で、そして、「総合福祉学部」が143人（11.9%）であった。

表 6－3 学部別人数

学 部	件 数	比 率
社会福祉学部	785	65.6%
社会学部	270	22.5%
総合福祉学部	143	11.9%
合 計	1,198	100.0%

6－4 学科別人数

学科別人数については、表 6－4 に示したとおり、「社会福祉学科」が1,028人（85.9%）で最も回答者が多く、続いて「社会学科・人間社会学科」が106人（8.8%）と続き、そして、「心理学科・実践心理学科」が64人（5.3%）であった。

表 6－4 学科別人数

学 科	件 数	比 率
社会福祉学科	1,028	85.9%
社会学科・人間社会学科	106	8.8%
心理学科・実践心理学科	64	5.3%
合 計	1,198	100.0%

6－5 淑徳大学同窓会の地方支部活動への参加の有無

淑徳大学同窓会の地方支部活動への参加の有無については、表 6－5 に示した通り、参加しているかについて「はい」は88人（7.3%）、「いいえ」は1,113人（92.7%）で、参加している割合は回答者の1割にも満たない結果であった。

表 6－5 回答者の同窓会支部活動への参加状況

淑徳大学同窓会の地方支部活動への参加	件 数	比 率
は い	88	7.3%
い い え	1,113	92.7%
合 計	1,201	100.0%

6－6 性別による就業の有無別人数

現在の就業の有無について表 6－6 に示したとおり、「はい」は954人（80.3%）、「いいえ」は234人（19.7%）で、8割以上が職に就いていた。また、性別にみると男性の89.1%、女性の75.9%が就業していた。

表6-6 就業の性別による人数

就職の有無		男性	女性	合計
はい	件数	351	603	954
	比率	89.1%	75.9%	80.3%
いいえ	件数	43	191	234
	比率	10.9%	24.1%	19.7%
合計	件数	394	794	1,188
	比率	100.0%	100.0%	100.0%

7. 学祖の項目の検討結果

7-1 学祖の項目の平均値

学祖の12項目の回答者数、平均値、標準偏差（SD）、最小値、そして最大値を算出し、表7-1に示した。いずれも平均値M = 3以上であったが、最も高い平均値を示したのは問12-2「仕事をする上で、周りの人に支えられていると思う」（M = 4.56, SD.65）で、続いて問12-3「仕事をするときは常に相手のことを考えている」（M = 4.28, SD.74）であった。

表7-1 学祖の項目の項目別回答者数・平均値・標準偏差（SD）・最小値・最大値

設問番号	項目内容	回答者数	平均値	標準偏差 (SD)	最小値	最大値
問12-1	『他者とともに生きる』ことを意識して仕事をしている	1,152	3.99	0.97	1	5
問12-2	仕事をする上で、周りの人に支えられていると思う	1,153	4.56	0.65	1	5
問12-3	仕事をするときは常に相手のことを考えている	1,150	4.28	0.74	1	5
問13-1	社会の一員として、支えられているという気持ちは強い方だと思う	1,193	3.81	0.88	1	5
問13-2	社会制度だけでは支えきれないので、ボランティア精神を重視することが必要だと思う	1,197	3.56	0.92	1	5
問13-3	社会を支えるのには、専門家と隣接領域の関係者が協働することが重要だと思う	1,192	4.10	0.78	1	5
問13-4	与えられた命に感謝して生きる気持ちが強い方だと思う	1,196	3.92	0.95	1	5
問13-5	社会の一員として使命感をもって生きたい、という気持ちが強い方だと思う	1,193	3.59	0.92	1	5
問13-6	人間の本性は、本質的に『善』なる心性をもつと思う	1,192	3.56	0.99	1	5
問14-1	一人ひとりが、自己実現を果たすことができるような社会づくりに貢献すること	1,199	3.74	0.93	1	5
問14-2	全ての人が平等な、偏見のない社会づくりに貢献すること	1,198	3.92	0.92	1	5
問14-3	利己主義ではなく、利他主義、共生の精神で生きること	1,196	3.82	0.84	1	5

7-2 学祖の項目の内的整合性と因子構成

項目の内的整合性を確認するために、12項目の α 係数を算出した。標準化された α 係数は.85で、これらの12項目は概念的整合性があることが確認された。また、設問ごとの整合性について検討するために12項目について因子分析を行った。その結果を表7-2に示した。

表7-2より、因子分析の結果3因子が抽出され、第1因子「人生観について」、第2因子「人生において重要なこと」、第3因子「仕事について」となり、アンケート調査の設問分類に添う因子構成を示す結果であった。各因子の α 係数は、第1因子.77、第2因子.78、第3因子.72であった。

各項目の評定値から因子別の平均値(M)と標準偏差(SD)を併せて表7-2の右欄に示した。最も平均値が高かったのは第3因子「仕事について感じていること」(M = 4.28, SD.63)で、続いて第2因子「人生について重要なこと」(M = 3.83, SD.74)、そして第1因子「人生観について」(M = 3.76, SD.63)であった。全12項目の平均値は、M = 3.90 (SD.54)であった。

表7-2 因子分析結果と合計および因子別平均値 (SD)

() 内SD

因子名	項目内容	Factor1	Factor2	Factor3	共通性	因子別平均値
第1因子	13-5 社会の一員として使命感をもって生きたい、という気持ち強い方だと思う	0.74*	0.24	0.26	0.67	M = 3.76(.63)
	13-4 与えられた命に感謝して生きる気持ち強い方だと思う	0.73*	0.07	0.22	0.58	
	13-6 人間の本性は、本質的に『善』なる心性をもつと思う	0.65*	0.22	-0.07	0.49	
	13-1 社会の一員として、支えられているという気持ちは強い方だと思う	0.61*	0.12	0.38	0.53	
	13-2 社会制度だけでは支えきれないので、ボランティア精神を重視することが必要だと思う	0.57*	0.32	0.08	0.43	
	13-3 社会を支えるのには、専門家と隣接領域の関係者が協働することが重要だと思う	0.40*	0.33	0.20	0.30	
第2因子	14-2 全ての人が平等な、偏見のない社会づくりに貢献すること	0.16	0.86*	0.06	0.77	M = 3.83(.74)
	14-3 利己主義ではなく、利他主義、共生の精神で生きること	0.31	0.75*	0.16	0.68	
	14-1 一人ひとりが、自己実現を果たすことができるような社会づくりに貢献すること	0.18	0.74*	0.12	0.60	
第3因子	12-2 仕事をする上で、周りの人に支えられていると思う	0.08	0.03	0.82*	0.68	M = 4.28(.63)
	12-3 仕事をするときは常に相手のことを考えている	0.15	0.11	0.78*	0.65	
	12-1『他者とともに生きる』ことを意識して仕事をしている	0.29	0.25	0.67*	0.60	
	固有价值	2.60	2.26	2.10	全項目	M = 3.90(.54)
	寄与率	21.7	18.8	17.5		
	累積寄与率			58.0		

8. 性別による検討

8-1

学祖の項目の合計と因子別の平均値に性別による有意差があるか t 検定によって検討し、結果を表 8-1 に示した。表 8-1 より、3 因子ならびに合計のいずれにおいても性別による有意差は示されなかった。

表 8-1 性別による平均値と検定結果

() 内 SD

因子名	性別	回答者数	平均値	t 検定結果
f1：人生観について	男性	389	3.76 (.62)	df = 1175, t = .12
	女性	788	3.75 (.63)	n.s.
f2：人生について重要なこと	男性	395	3.83 (.77)	df = 1192, t = .07
	女性	799	3.83 (.73)	n.s.
f3：仕事について感じていること	男性	385	4.30 (.65)	df = 1144, t = .54
	女性	761	4.27 (.62)	n.s.
合計	男性	379	3.91 (.54)	df = 1122, t = .54
	女性	745	3.90 (.54)	n.s.

9. 卒期別による検討

9-1

学祖の項目の合計と因子別の平均値に卒期別による有意差があるか分散分析によって検討した。主効果が認められた因子については Tukey 法による多重比較によって検討し結果を表 9-1 に示した。表 9-1 より、f 1：第 1 因子「人生観について」は、卒期 1 期～卒期 27 期までの平均値が卒期 29 期～卒期 45 期までより有意に高かった ($f = 15.84$, $df = 4$, $p < .0001$)。この

表 9-1 卒期別の平均値と検定結果

() 内 SD

卒期区分	f1：人生観について	f2：人生で重要なこと	f3：仕事について感じていること	合計
卒期 1 期生～卒期 9 期生	3.94 (.63) ^a	3.98 (.71) ^a	4.41 (.56) ^a	4.09 (.50) ^a
卒期 11 期生～卒期 17 期生	3.88 (.56) ^a	3.95 (.72) ^a	4.40 (.59) ^a	4.03 (.50) ^a
卒期 19 期生～卒期 27 期生	3.82 (.57) ^a	3.79 (.73) ^{ab}	4.31 (.60) ^a	3.94 (.50) ^a
卒期 29 期生～卒期 35 期生	3.67 (.62) ^b	3.75 (.74) ^b	4.24 (.66) ^{ab}	3.83 (.52) ^b
卒期 37 期生～卒期 45 期生	3.55 (.67) ^b	3.71 (.76) ^b	4.13 (.66) ^b	3.73 (.58) ^b
検定結果	$f = 15.84$, $df = 4$, $p < .0001$	$f = 6.09$, $df = 4$, $p < .0001$	$f = 7.85$, $df = 4$, $p < .0001$	$f = 16.43$, $df = 4$, $p < .0001$

*平均値の肩に付した英字は Tukey 法による多重比較の結果を示す。英字が異なるものについては 5 % 水準で有意差があることを示す。

有意差は、合計 ($f = 16.43, df = 4, p < .0001$) についても同様の結果であった。f 2 : 第2因子「人生で重要なこと」では卒期1期～卒期17期までが卒期29期～卒期45期より有意に高かった ($f = 6.09, df = 4, p < .0001$)。f 3 : 第3因子「仕事について感じていること」では、卒期1期～卒期27期までの平均値が、卒期37期～卒期45期までより有意に高かった ($f = 7.85, df = 4, p < .0001$)。以上の結果から、卒期が遡って古いほど学祖の項目について有意に高い意識をもっていることが示された。

10. 学部別による検討

学祖の項目の合計と因子別の平均値に学部別による有意差があるか分散分析によって検討した。主効果が認められた因子についてはTukey法による多重比較によって検討し結果を表10-1に示した。表10-1より、f 1 : 第1因子「人生観について」($f = 16.71, df = 2, p < .0001$)そしてf 3 : 第3因子「仕事について感じていること」($f = 12.34, df = 2, p < .0001$)、合計 ($f = 18.56, df = 2, p < .0001$) のいずれにおいても社会福祉学部の平均値が、社会学部および総合福祉学部の平均値より有意に高かった。しかし、f 2 : 第2因子「人生で重要なこと」においては総合福祉学部の平均値が社会福祉学部と同水準の高さであり、同時に社会学部と同水準の低さであるとの結果であった ($f = 4.53, df = 2, p < .05$)。

以上の結果から、社会福祉学部の卒業生が、社会学部および総合福祉学部の卒業生より学祖の項目について有意に高い意識をもっていることが示された。

表10-1 学部別の平均値と検定結果

() 内SD

学部名	f1 : 人生観について	f2 : 人生で重要なこと	f3 : 仕事について感じていること	合計
社会福祉学部	3.83 (.60) ^a	3.88 (.73) ^a	4.35 (.60) ^a	3.98 (.51) ^a
社会学部	3.62 (.64) ^b	3.74 (.78) ^b	4.20 (.67) ^b	3.79 (.55) ^b
総合福祉学部	3.59 (.72) ^b	3.75 (.75) ^{ab}	4.10 (.67) ^b	3.75 (.61) ^b
検定結果	$f = 16.71, df = 2, p < .0001$	$f = 4.53, df = 2, p < .05$	$f = 12.34, df = 2, p < .0001$	$f = 18.56, df = 2, p < .0001$

*平均値の肩に付した英字はTukey法による多重比較の結果を示す。英字が異なるものについては5%水準で有意差があることを示す。

11. 学科別による検討

学祖の項目の合計と因子別の平均値に学科別による有意差があるか分散分析によって検討した。主効果が認められた因子についてはTukey法による多重比較によって検討し結果を表11-1に示した。表11-1より、f 1 : 第1因子「人生観について」($f = 23.51, df = 2, p < .0001$)、そしてf 3 : 第3因子「仕事について感じていること」($f = 20.16, df = 2, p < .0001$)および合計 ($f = 25.20, df = 2, p < .0001$) のいずれにおいても社会福祉学科の平均値が、社会学科・人

間社会学科および心理学科・実践心理学科の平均値より有意に高かった。しかし、 f_2 ：第2因子「人生で重要なこと」においては心理学科・実践心理学科の平均値が社会福祉学科と同水準の高さであり、同時に社会学科・人間社会学科と同水準の低さであるという結果であった ($f = 5.38, df = 2, p < .01$)。

以上の結果から、社会福祉学科の卒業生が、社会学科・人間社会学科および心理学科・実践心理学科の回答者より学祖の項目について有意に高い意識をもっていることが示された。

表11-1 学科別の平均値と検定結果

() 内SD

学部名	f1：人生観について	f2：人生で重要なこと	f3：仕事について感じていること	合計
社会福祉学科	3.80 (.60) ^a	3.85 (.73) ^a	4.33 (.60) ^a	3.95 (.51) ^a
社会学科・人間社会学科	3.44 (.74) ^b	3.61 (.85) ^b	3.98 (.79) ^b	3.60 (.65) ^b
心理学科・実践心理学科	3.46 (.71) ^b	3.77 (.69) ^{ab}	4.01 (.66) ^b	3.67 (.58) ^b
検定結果	$f = 23.51, df = 2, p < .0001$	$f = 5.38, df = 2, p < .01$	$f = 20.16, df = 2, p < .0001$	$f = 25.20, df = 2, p < .0001$

*平均値の肩に付した英字はTukey法による多重比較の結果を示す。英字が異なるものについては5%水準で有意差があることを示す。

12. 淑徳大学同窓会の地方支部活動への参加の有無別による検討

学祖の項目の合計と因子別の平均値に同窓会地方支部活動への参加の有無別による有意差があるか検討し結果を表12-1に示した。表12-1より、 f_1 ：第1因子「人生観について」($t = 3.83, df = 1176, p < .0001$)、 f_2 ：第2因子「人生で重要なこと」($t = 2.82, df = 1193, p < .01$)そして f_3 ：第3因子「仕事について感じていること」($t = 2.76, df = 1145, p < .01$)、合計($t = 3.91, df = 1123, p < .0001$)のいずれにおいても同窓会活動への参加有り群の平均値が、同窓会地方支部活動への参加無し群の平均値より有意に高かった。

以上の結果から、同窓会の地方支部活動へ参加している回答者が、参加していない回答者より学祖の項目について有意に高い意識をもっていることが示された。

表12-1 同窓会活動への参加の有無別の平均値と検定結果

() 内SD

内容	f1：人生観について	f2：人生で重要なこと	f3：仕事について感じていること	合計
参加有り	4.00 (.68)	4.04 (.80)	4.46 (.58)	4.12 (.59)
参加無し	3.74 (.62)	3.81 (.74)	4.27 (.63)	3.89 (.53)
検定結果	$t = 3.83, df = 1,176, p < .0001$	$t = 2.82, df = 1,193, p < .01$	$t = 2.76, df = 1,145, p < .01$	$t = 3.91, df = 1,123, p < .0001$

13. 現在の就業の有無別による検討

学祖の12項目の合計と因子別の平均値に現在（調査時点）の就業の有無別による有意差がある

か検討し結果を表13-1に示した。表13-1より、f 3：第3因子「仕事について感じていること」($t = 2.36, df = 1135, p < .05$)のみに就業している群において、就業していない群より有意に平均値が高いことが示された。f 1：第1因子「人生観について」、f 2：第2因子「人生で重要なこと」そして合計のにおいては有意差は示されなかった。

以上の結果から、就業している卒業生は仕事の取り組みにおいて学祖の項目について有意に高い意識をもっていることが示された。

表13-1 就業の有無別の平均値と検定結果

() 内SD

内容	f1：人生観について	f2：人生で重要なこと	f3：仕事について感じていること	合計
就業している	3.75 (.63)	3.83 (.75)	4.31 (.62)	3.91 (.54)
就業していない	3.77 (.65)	3.82 (.73)	4.19 (.67)	3.90 (.57)
検定結果	$t = .70, df = 1,166, n.s.$	$t = .17, df = 1,182, n.s.$	$t = 2.36, df = 1,135, p < .05$	$t = .06, df = 1,114, n.s.$

14. 「共生論」の履修の有無別による検討

学祖の項目の合計と因子別の平均値に「共生論」の履修の有無別による有意差があるか検討した。共生論の履修については、「履修した」「履修しなかった」の他に、「科目が無かった」および「覚えていない」の4選択肢を設定した。その内訳は表14-1に示した。表14-1より、「履修した」と回答したのは239 (20.0%) 人、「履修しなかった」と回答したのは189 (15.8%) 人、「科目が無かった」328 (27.5%) 人、「覚えていない」437 (36.7%) 人という結果であった。

学祖の項目について「履修した」および「履修しなかった」と回答した2群の平均値に有意差があるか検討した結果を表14-2に示した。表14-2より、f 1：第1因子「人生観について」、f 2：第2因子「人生で重要なこと」そしてf 3：第3因子「仕事について感じていること」および合計のいずれにおいても有意差は示されなかった。

以上の結果から、共生論の履修の有無によって学祖の項目への意識に有意な相違は示されなかった。

表14-1 共生論履修についての回答者別の内訳

() 内%

内容	履修した	履修しなかった	科目が無かった	覚えていない
人数	239 (20.0)	189 (15.8)	328 (27.5)	437 (36.7)

表14-2 共生論履修の有無別による平均値と検定結果

() 内SD

内容	f1：人生観について	f2：人生で重要なこと	f3：仕事について感じていること	合計
履修した	3.71 (.63)	3.84 (.74)	4.24 (.63)	3.87 (.54)
履修しなかった	3.73 (.66)	3.91 (.71)	4.25 (.63)	3.90 (.54)
検定結果	$t = .27, df = 422, n.s.$	$t = 1.11, df = 425, n.s.$	$t = .17, df = 411, n.s.$	$t = .51, df = 407, n.s.$

15. 「長谷川良信の思想と生涯」の履修の有無別の検討

学祖の項目の合計と因子別の平均値に「長谷川良信の思想と生涯」の履修の有無別による有意差があるか検討した。「長谷川良信の思想と生涯」の履修については、「履修した」「履修しなかった」の他に、「科目が無かった」および「覚えていない」の4選択肢を設定した。その内訳は表15-1に示した。表15-1より、「履修した」と回答したのは258 (21.6%) 人、「履修しなかった」と回答したのは240 (20.1%) 人、「科目が無かった」247 (21.6%) 人、「覚えていない」437 (36.7%) 人であった。

「履修した」および「履修しなかった」と回答した2群の平均値について有意差を検討した結果を表15-2に示した。表15-2より、f 1：第1因子「人生観について」、f 2：第2因子「人生で重要なこと」そしてf 3：第3因子「仕事について感じていること」および合計のいずれにおいても有意差は示されなかった。

以上の結果から、「長谷川良信の思想と生涯」の履修の有無によって学祖の項目への意識に有意な相違は示されなかった。

表15-1 「長谷川良信の思想と生涯」履修についての回答者別の内訳

() 内%

内容	履修した	履修しなかった	科目が無かった	覚えていない
人数	258 (21.6)	240 (20.1)	247 (21.6)	437 (36.7)

表15-2 「長谷川良信の思想と生涯」履修の有無別による平均値と検定結果

() 内SD

内容	f1：人生観について	f2：人生で重要なこと	f3：仕事について感じていること	合計
履修した	3.74 (.61)	3.83 (.76)	4.26 (.62)	3.89 (.53)
履修しなかった	3.68 (.66)	3.79 (.70)	4.23 (.67)	3.83 (.55)
検定結果	t = 1.06, df = 488, n.s.	t = .75, df = 495, n.s.	t = .65, df = 478, n.s.	t = 1.20, df = 471, n.s.

16. 「宗教行事」への参加の有無別の検討

学祖の項目の合計と因子別の平均値に「宗教行事」への参加の有無別による有意差があるか検討した。「宗教行事」への参加については、「参加した」「参加しなかった」の他に、「機会が無かった」および「覚えていない」の4選択肢を設定した。その内訳は表16-1に示した。表16-1より、「参加した」と回答したのは293 (24.5%) 人、「参加しなかった」と回答したのは555 (46.4%) 人、「機会が無かった」127 (10.6%) 人、「覚えていない」220 (18.4%) 人であった。

「参加した」および「参加しなかった」と回答した2群の平均値について有意差を検討した結果を表16-2に示した。表16-2より、f 1：第1因子「人生観について」(t = 3.83, df = 831,

p<.0001)、f 2：第2因子「人生で重要なこと」(t = 4.91, df = 843, p<.0001)そしてf 3：第3因子「仕事について感じていること」(t = 3.04, df = 813, p<.01)の3因子および合計(t = 5.09, df = 798, p<.0001)のすべてにおいて「参加した」群の平均値が有意に高かった。

以上の結果から、「宗教行事」に参加した回答者は学祖の項目への意識が有意に高かったことが示された。

表16－1 宗教行事参加についての回答者別の内訳

() 内%

内容	参加した	参加しなかった	機会が無かった	覚えていない
人数	293 (24.5)	555 (46.4)	127 (10.6)	220 (18.4)

表16－2 宗教行事参加の有無別による平均値と検定結果

() 内SD

内容	f1：人生観について	f2：人生で重要なこと	f3：仕事について感じていること	合計
参加した	3.86 (.61)	3.99 (.71)	4.39 (.59)	4.03 (.51)
参加しなかった	3.69 (.62)	3.73 (.74)	4.25 (.64)	3.83 (.52)
検定結果	t = 3.83, df = 831, p<.0001	t = 4.91, df = 843, p<.0001	t = 3.04, df = 813, p<.01	t = 5.09, df = 798, p<.0001

17. 母校を誇りに思う気持ちの高中低群別による検討

母校を誇りに思う気持ちについて表17－1に示した10項目を設定した。回答方法は「思わない：1」から、「あまり思わない：2」、「どちらでもない：3」、「やや思う：4」そして「思う：

表17－1 母校を誇りに思うことについての質問項目の平均値・標準偏差(SD)・最小値・最大値

項目内容	回答者数	平均値	標準偏差(SD)	最小値	最大値
1. 福祉系大学としての歴史と伝統	1,193	4.00	0.96	1.00	5.00
2. 充実したカリキュラムと教育体制	1,178	3.32	0.92	1.00	5.00
3. 教育内容の水準の高さ	1,179	3.09	0.86	1.00	5.00
4. 施設の充実	1,178	3.02	0.88	1.00	5.00
5. 美しい自然のあるキャンパス	1,181	3.37	0.97	1.00	5.00
5. 就職率の高さ	1,176	3.13	0.92	1.00	5.00
7. 自由で、活気のある校風	1,179	3.32	0.94	1.00	5.00
8. 学生の勤勉さ	1,180	3.14	0.99	1.00	5.00
9. 安定した経営と将来性	1,178	3.10	0.87	1.00	5.00
10. 卒業生の大学への帰属意識と絆の強さ	1,178	3.04	0.92	1.00	5.00
合計	1,161	3.25	0.68	1.00	5.00

5」までの5段階で考えて、自分の気持ちに最もあてはまる数値を一つ選んでもらった。全体と各項目の回答者数、平均値、標準偏差（SD）、最小値、最大値を算出して表17-1に記した。

母校を思う気持ちの合計得点（最大値50～最小値10点）について上位25%を高群、下位25%を低群、その中間の50%を中群とした。その結果、高群は36点以上、50点以下、中群は31点以上、35点以下、低群は10点以上、30点以下となった。各群の人数内訳は表17-2の回答者数に記した。

「母校を誇りに思う気持ち」の高中低群別によって、学祖の項目の合計と因子別の平均値に有意差があるか分散分析によって検討した。3因子および合計の全てに主効果が認められたのでTukey法による多重比較によって検討した結果を表17-2に併せて示した。表17-2より、f 1：第1因子「人生観について」（ $f = 89.67, df = 2, p < .0001$ ）、f 2：第2因子「人生で重要なこと」（ $f = 69.61, df = 2, p < .0001$ ）そしてf 3：第3因子「仕事について感じていること」（ $f = 37.00, df = 2, p < .0001$ ）の3因子および合計（ $f = 108.50, df = 2, p < .0001$ ）のすべてにおいて高群が最も高く、中群がそれに続き、低群が最も低いという3群間に有意差が認められた。この結果から、母校を誇りに思う気持ちが強いほど、学祖の項目を高く意識していることが示された。

表17-2 母校を誇りに思う気持ちの高中低群別による平均値と検定結果

() 内SD

内容	回答者数	f1：人生観について	f2：人生で重要なこと	f3：仕事について感じていること	合計
高群	325	4.10 (.52) ^a	4.20 (.60) ^a	4.52 (.51) ^a	4.23 (.42) ^a
中群	489	3.72 (.56) ^b	3.77 (.65) ^b	4.25 (.59) ^b	3.86 (.46) ^b
低群	347	3.51 (.67) ^c	3.58 (.84) ^c	4.12 (.71) ^c	3.67 (.59) ^c
検定結果	計 1,161	$f = 89.68, df = 2, p < .0001$	$f = 69.61, df = 2, p < .0001$	$f = 37.00, df = 2, p < .0001$	$f = 108.50, df = 2, p < .0001$

*平均値の肩に付した英字はTukey法による多重比較の結果を示す。英字が異なるものについては5%水準で有意差があることを示す。

Ⅲ 考 察

18-1 有意差が示されなかった変数についての考察

本報告では、卒業生を対象とした「卒業後の動向および仕事・人生へ向きあう意識について」のアンケート調査の中から、学祖の思想・理念についての12項目について検討した。独立変数として選定したのは、性別、卒期別、学部別、学科別、淑徳大学同窓会の地方支部活動への参加の有無別、現在の就業の有無別、科目としての「共生論」および「長谷川良信の思想と生涯」の履修の有無別、「宗教行事」への参加の有無別、「母校である淑徳大学を誇りに思うこと」の高中低群別についての10要因であった。

その結果、有意差が示されなかったのは、性別、「共生論」および「長谷川良信の思想と生涯」の履修の有無別であった。性別の平均値は、f 3：第3因子「仕事について感じていること」、続いてf 2：第2因子「人生について重要なこと」、そしてf 1：第1因子「人生観について」の順

であることと、因子別の平均値についても男女で相違はなかった。開学以来、実学を重んじた教育理念は、男女を問わず、他者に支えられるなかでいかに自分を生かすか、他者と共にいかに社会で役立つ存在であるかについて男女の相違なく問い続ける姿勢をもたしているのであろう。

また、「共生論」と「長谷川良信の思想と生涯」の履修の有無別においても有意差が示されなかった。この設問について「科目が無かった」と「覚えていない」の回答は50～60%以上となっており、今回のアンケート回答者全体の意識を反映していない要因ともいえた。学生の履修科目選択の理由は、まず、必修科目であるかあるいは選択科目であるかの別による。教学上必修科目であった時期であっても、学生は学祖の思想や理念への関心という本質的な動機によってのみ履修する訳ではない。必修科目に位置づけられることで、科目への関心が全く無い学生が履修する率は高くなるであろう。また履修の可否を決定するのは、個人の履修についての意図のみならず時間割での配置など教務上の制約にも左右される。それらのことから考えても、履修している学生が学祖の思想・理念により高い関心を意識していたことにはならない。しかし、履修の結果、理解や関心が高まった学生がいたはずであるが、本調査結果においては反映されるまでには至らなかったと考えられる。この結果からは、これらの科目が自校教育の一環として建学の精神を理解し、私立大学の独自性を学ぶ機会として設定されたのであれば、目的の明確化、学生への意識づけ、履修方法などについて再検討する必要があることが示唆された。30%以上が覚えていないと回答していることから科目の位置づけの明確化が必要であろう。「共生論」は現在も開講されており、「共生：ともいき」が大学の基本的理念とされているのであるからには、その内容、科目の位置づけ、履修方法などが再検討される必要がある。

18-2 有意差が示された変数についての考察

有意差が示されたのは、卒期別、学部別、学科別、淑徳大学同窓会の地方支部活動への参加の有無別、現在の就業の有無別、宗教行事への参加の有無別、「母校である淑徳大学を誇りに思うこと」の高中低群別についての7要因であった。

これらの結果において卒期別と学部別とは相互に同期している。卒期1期～卒期27期までは社会福祉学部の卒業生のみである。卒期29期～卒期35期では社会学部の卒業生を輩出しており、卒期37期～卒期45期には総合福祉学部の卒業生が輩出された。今回の分析結果は、卒期別の結果と学部別の結果に一貫した傾向があり矛盾していない。卒期が下がって新しくなるにしたがって学祖の思想・理念への意識が低くなっていたことは、社会福祉学部から社会学部へ、そして総合福祉学部への変遷に伴って学祖の思想・理念への意識が低くなっていたと言い換えることができた。学部名の変更は、学科の構成の相違とも関連しており、社会学部への改名では社会学科の開設に伴い、その10年後に心理学科が開設された。淑徳大学が社会福祉学部、社会福祉学科という単学部・単学科の大学から、単学部、複学科の大学への展開を果たした時期である。さらに、学科別の検討結果を参照すると、社会福祉学科と比較して後発の社会学科・人間社会学科および心

理学科・実践心理学科の意識が有意に低かった結果とも一致する。今回のアンケートの対象とはしなかったが、社会学部社会学科の一期生が卒業する時期を同じくして、埼玉キャンパスが開設され2キャンパスを有する大学にもなっており、実際は複キャンパス、複学部、複学科の大学となっていた。この学部・学科の改変は大学の構造の変更でもあり、「福祉の淑徳」としてアイデンティティを確立してきた淑徳大学が、社会学と心理学という新たな学問領域を包含する大学として、建学の精神の継承を模索しなければならなかった時期に入ったと考えられた。学祖の思想・理念をどのように教育で伝えていくかが検討され、「共生論」「長谷川良信の思想と生涯」などの自校教育の科目が開講されていたが、今回の検討結果からはその効果を確認することは出来なかった。全体の結果からは、社会学と心理学を専攻する学生が、どのように「福祉の淑徳」の伝統を認識することができるのかの困難を示唆しているとも考えられた。

それでは社会福祉学科の回答者が他の2学科の回答者より学祖の思想・理念への認識が高いことは示されたが、社会福祉学科生は45年間にわたり変化すること無く学祖の思想・理念を認識していたのであろうか。ここで社会福祉学科のみを対象にして分散分析によって有意差があるかの検討を加えた結果を表18-2に示した。表18-2より、卒期1期～卒期27期までは同じ水準で有意に認識が高いが、卒期29期から認識の低下が示唆され、卒期37期～卒期45期においては社会福祉学科生でも有意に認識が低くなっていた。大学の拡大的発展は、「福祉の淑徳」の核となるべき社会福祉学科の卒業生においても学祖の思想・理念への認識が低くなっていたと云えた。

表18-2 社会福祉学科のみの卒期別の平均値と検定結果

() 内SD

卒期区分	f1: 人生観について	f2: 人生で重要なこと	f3: 仕事について感じていること	合計	備考
卒期1期生～卒期9期生	3.94 (.63) ^a	3.98 (.71) ^a	4.41 (.56) ^a	4.09 (.50) ^a	社会福祉学科生のみ
卒期11期生～卒期17期生	3.88 (.56) ^a	3.95 (.72) ^a	4.40 (.59) ^a	4.03 (.50) ^a	社会福祉学科生のみ
卒期19期生～卒期27期生	3.82 (.57) ^a	3.79 (.73) ^{ab}	4.31 (.60) ^{ab}	3.94 (.50) ^{ab}	社会福祉学科生のみ
卒期29期生～卒期35期生	3.70 (.61) ^b	3.78 (.74) ^{ab}	4.31 (.60) ^{ab}	3.88 (.50) ^b	社会学科生加わる
卒期37期生～卒期45期生	3.65 (.60) ^b	3.75 (.71) ^b	4.22 (.60) ^b	3.82 (.52) ^b	心理学科生加わる
検定結果	f = 7.33, df = 4, p < .0001	f = 4.31, df = 4, p < .01	f = 2.88, df = 4, p < .05	f = 8.01, df = 4, p < .0001	

*平均値の肩に付した英字はTukey法による多重比較の結果を示す。英字が異なるものについては5%水準で有意差があることを示す。

さて、同窓会の地方支部活動への参加の有無別の検討では、活動に参加している群の学祖の思想・理念への認識が有意に高かった。この結果は、母校への帰属意識の高さとの関連で考えることができ、妥当な結果であった。しかしここで着目するべきは、同窓会地方支部活動に参加していた回答者は88人、回答者の7.3%に過ぎなかったということである。残りの92.7%は地方支部活動に参加していなかった。大学を支える大きな柱の一つとして卒業生の存在がある。それは社会でどのように活躍しているかでその大学の教育が評価されるからであり、その結果、直接・間接に卒業生が母校を支えることになるからである。そのためには卒業生の組織である同窓会を機能させる必要がある。淑徳大学同窓会地方支部は今後のさらなる発展が期待されるが、それには卒

業生が同窓会に所属していることを自覚することが必要である。大学によっては、卒業式に同窓会の入会式を行うことで同窓会を通じて大学への帰属が続くことを意識づけるなどの試みを行っている。淑徳大学ではどのような方法が可能であるか、どのように地方同窓会活動を活発化できるか、検討される必要があるだろう。

つぎに、就業の有無別の検討では、f 3：第3因子「仕事について感じていること」において、仕事についている回答者の意識が仕事についていない回答者より「他者に支えられている」、「他者と共に生きることを意識して仕事をしている」そして「仕事をするときは常に相手のことを考えている」と、他者のことを考えて仕事をしている意識が高かった。それは、他者と共に生きるという学祖の理念が仕事において強く意識され、淑徳大学の卒業生、すなわち「淑徳人」の特徴を形作っているとみることができた。

18-3 宗教行事への参加の有無別についての考察

さて、宗教行事への参加の有無別の検討では、参加していた回答者が有意に高い認識を示した。宗教行事は現在、1年生は4月の降誕会（花祭り）への参加が義務づけられているが、その他の学年では年間4回開催される宗教行事への参加は強制されるものではない。参加が原則として義務とされるのは給付奨学生、ブラジル研修参加者などが聖歌隊の一員として参加することが義務づけられている学生である。しかしそれすら強制されるものではなく本人の意志が尊重されている。教員を除けば、学生の参加は個人的に参加の意志をもった者といえる。そのような実態のなかで宗教行事に参加したと回答した293名とはいかなる人達であったのかをさらに検討した結果を表18-3-1～表18-3-7に示した。

表18-3-1 宗教行事に参加していた人の性別人数（％）

性別	回答者数	参加者数（割合）
男性	396	77（19.4）
女性	804	215（26.7）

*（ ）内は回答者数に占める割合（％）である、以下同じ。

表18-3-2 宗教行事に参加していた人の卒期別人数（％）

卒期区分	回答者数	参加者数（割合）
卒期1期生～卒期9期生	172	35（20.3）
卒期11期生～卒期17期生	238	30（12.6）
卒期19期生～卒期27期生	254	73（28.7）
卒期29期生～卒期35期生	242	63（26.0）
卒期37期生～卒期45期生	286	89（31.1）

表18-3-3 宗教行事に参加していた人の学部別人数 (%)

学部名	回答者数	参加者数 (割合)
社会福祉学部	785	164 (20.9)
社会学部	270	79 (29.3)
総合福祉学部	143	48 (33.6)

表18-3-4 宗教行事に参加していた人の学科別人数 (%)

学科名	回答者数	参加者数 (割合)
社会福祉学科	1,028	245 (23.8)
社会学科・人間社会学科	106	26 (24.5)
心理学科・実践心理学科	64	22 (34.4)

表18-3-5 宗教行事に参加していた人の同窓会活動有無別人数 (%)

内容	回答者数	参加者数 (割合)
同窓会活動参加有り	88	23 (26.1)
同窓会活動参加無し	1,113	269 (24.2)

表18-3-6 宗教行事に参加していた人の就業の有無別人数 (%)

内容	回答者数	参加者数 (割合)
就業している	954	241 (25.3)
就業していない	234	52 (22.2)

表18-3-7 宗教行事に参加していた人の母校を誇りに思う気持ちの高低群別人数 (%)

学部名	回答者数	参加者数 (割合)
高群	228	109 (47.8)
中群	341	103 (30.3)
低群	279	81 (29.0)

$$\chi^2 = 24.3, p < .0001$$

これらの表では、それぞれの独立変数についてアンケート回答者数に対する宗教行事参加者数とその割合を示した。表18-3-1の性別では、アンケート回答者の男性396人の回答者の内、参加者は77人で19.4%を占めることを意味している。女性は804人のうちの215人で、それは女性回答者の26.7%ということであった。この結果からは、女性の回答者の四分の一は宗教行事に参加していた人であったことが判る。これらの結果について先の有意差が示された変数の検討結果

と相違している点は、卒期別では、卒期が下がって新しい卒期の回答者の宗教行事参加の割合が高いと云う点である。その結果は、学部別の結果とも矛盾せず、社会福祉学部よりも社会学部が多く、それよりも総合福祉学部の宗教行事参加者の割合が高かった。また、学科別では心理学科の回答者の三分の一が宗教行事に参加していた。その他の特徴として、「母校を誇りに思う気持ち」についてその分布をみると、参加していた者が有意に多く高群に分別された ($\chi^2 = 24.3$, $P < .0001$)。また平均値でみても、宗教行事に参加していた回答者は参加していなかった回答者よりも「母校を誇りに思う気持ち」の総合点の平均値が有意に高かった (参加者 $M = 34.2$ SD 6.82, 不参加者 $M = 31.6$, SD 6.45, $t = 5.31$, $df = 1$, $p < .0001$)。

表18-3-1～表18-3-7によると、宗教行事への参加者は、各卒期、各学部、各学科、同窓会地方支部活動参加の有無、就業の有無に一定の割合を占めていた。特に、社会学部 (29.3%)、総合福祉学部 (33.6%) になってからの増加と、心理学科の参加者 (34.4%) が多かったことは特筆すべきことであった。これらの結果から、宗教行事に参加していた回答者は全体の傾向とは異なった傾向を示しており、参加の動機は淑徳大学の教育理念、その根底には学祖の思想・理念に共感することでの参加という意志が推察された。学祖の「福祉を宗教および教育と一体なもの」とするという考えに共感するものであり、そのような理念に基づいた淑徳大学での学びに満足して母校を誇りに思う気持ちを強くしていることが示された。

これらの卒業生が近年の淑徳大学の学びにおいて、学祖の理念である「福祉を宗教および教育と一体なもの」という精神性を学びとっていたことは、この結果を淑徳大学の伝統継承の新たな戦略の柱とする可能性を示唆している。それは、単に大学行事に宗教的な儀式をもっと導入するとか、宗教行事を増やすとか、宗教行事への参加を学生に義務づけるとか云うことではない。学祖が自らの精神の拠り所を宗教に求めたように、卒業生がその人生において指針となる精神的支柱を学びとれる教育環境が用意されることである。4キャンパス7学部を擁する複合大学へと発展した淑徳大学が、学祖の思想と理念をどのように教育目標に置きかえるかが課題である。各キャンパス、各学部、各学科において、その思想・理念の具現化の様相は異なるであろう。しかし、卒業生がその「仕事について感じる事」、その「人生観について：生きて行く上での意識」、そして「人生において重要だと考える事」などにおいて大学での学祖の思想・理念からの学びを精神的支えとできるような教育環境によって「福祉の淑徳」の伝統を継承できる可能性があることを本調査結果は示唆している。

IV まとめと今後の課題

本報告において、学祖の思想・理念という観点から統計的な解析を実施したことによって、開学後の50年間の教育が卒業生にどのような意識をもたらしていたかの実態の一端を明らかにすることができた。

学祖の思想・理念への意識は、1期から45期と卒期を重ねるに従って低くなっていた。その意識の違いは、社会福祉学部から社会学部へ、そして総合福祉学部への学部の改名と時期を同じくして低くなっており、学部間の意識に有意な差をもたらしていた。それは同時に学科の増設、すなわち社会学科の開設、続く心理学科の開設とも重なるものであった。淑徳大学が社会福祉学科の単科大学から学部名を改め、そして社会学および心理学という隣接学問領域を併せ持つ総合大学へ展開した時期とも重なっていた。これらの結果からは、大学の拡大によって学祖の思想・理念への意識が低くなっていたと云えた。社会福祉の思想を基盤とする学祖の思想・理念が社会学や心理学では理解され難いことが理由となるのかの疑問に答えるために、社会福祉学科のみを対象にして50年間の変化を検討したところ、近年の15年前頃から意識の低下傾向があり、直近の5年間においては社会福祉学科においても有意に意識が低かった。この結果は、現在、淑徳大学が学祖の思想・理念をどのように伝えていくかに課題があることを示唆していた。そのことを裏付けるものとして、建学の理念を伝えるための科目として設定されていた「共生論」および「長谷川良信の思想と生涯」を履修したことでその意識に違いはなく、学祖の思想・理念を伝える科目がどのように教授されるべきかを検討する必要があることを示唆していた。本調査回答者の半数以上がこの科目を履修していなかったかあるいは科目について覚えていなかったことも今後の検討において無視することができない実態であった。

一方で、仕事に向きあう意識においては男女の別なく、学祖の思想・理念を高く意識していた。卒業生が仕事に臨む意識において学祖の思想・理念が強く意識されていた実態は、淑徳大学の教育成果として評価できるだろう。そして宗教行事に参加していた回答者は、学祖の思想・理念を高く意識し、母校としての淑徳大学を誇りに思う気持ちが強かった。それらが示す実態は、近年の総合福祉学部の回答者で増加しており、心理学科の回答者では三分の一を占め、社会福祉学科および社会学科の回答者の四分の一を占めていた。このことは、大学の拡大・展開においても、淑徳大学での教育において学祖の思想・理念を大学の学びとし、「人生へ向きあう意識」での精神的支柱としている卒業生が増えていることを示唆していた。また、同窓会の地方支部に参加していた回答者が学祖の思想・理念への意識が高く、母校を誇りに思う気持ちが強かったことは妥当な結果であったが、同窓会の地方支部に所属する割合が低かったことから、今後、同窓会を通じての大学への帰属意識を育てる対策が必要であることを明らかにしていた。

これらの結果を、「淑徳大学五十年史」（淑徳大学、2015）と共に見直していくと、今後の50年をどのように展開していくかの課題を検討するための方向性が得られるだろう。本報告が基にしたアンケート調査は、淑徳大学開学50年にして初めての卒業生を対象とした調査であった。その結果、50年間についての実態のある側面を明らかにしたことに意義があった。しかし、その回収率は通常の社会調査の回収率を上回っていたとはいえ、卒業生が対象であることを鑑みれば、同窓会活動などからその帰属意識を斟酌してもさらに高い回収率を期待したいところであった。そこにこの調査結果の限界があった。今後も継続的にこのような調査を実施することによって卒業

生の実態を把握して、それを大学運営・教育に反映させることが必要であろう。それらの努力によって、淑徳大学の次なる50年、さらにそれに続く未来においても繁栄がなされることを願って止まない。

おわりに

本調査報告は、社会福祉研究所が平成25年度から平成27年度までの3年間に渡って実施したアンケート調査「卒業後の動向および仕事・人生へ向きあう意識について」の結果を、学祖の思想・理念への意識に限定して分析したものである。

アンケート調査には1千2百人を超える卒業生からの御回答を得た。御回答くださった卒業生には心より感謝を申しあげる。また、調査対象とならなかった卒期が偶数期の方々からも御協力の意向をお伝えいただいたことは、大きな励ましとなった。多くの卒業生が母校に協力したいとの意志をもってくださっていることに気づかされた。

また、この調査の実施主体として本務の傍ら作業を進めて下さった社会福祉研究所運営委員、川眞田喜代子教授、黒川雅子准教授、山西 哲也准教授、伊藤千尋講師、竹下智美講師、池畑美恵子助教の各位に感謝の意を伝えたい。事務局の朝倉美穂子氏には全体の遂行を手順良く完成まで進めていただいたことに感謝申しあげる。

多くの方々の御協力のもとにこの調査が遂行され、その結果として有用な多くの情報を得ることができたことを主催者としてこころから喜び、ご協力いただいた関係者すべての皆様に感謝を申しあげ、おわりの言葉とさせていただきます。

【文献】

- 大乘淑徳学園・長谷川仏教文化研究「吉田久一・長谷川匡俊（解説・解題）長谷川 良信選集（上巻・下巻）」『大乘淑徳学園・長谷川仏教文化研究所刊』、1973
- 長谷川匡俊「トゥギャザー ウィズ ヒム 長谷川良信の生涯」『新人物往来社』、1992
- 長谷川匡俊（監修）『長谷川良信全集』（第1巻～第4巻）『日本図書センター』、2004
- 長谷川匡俊「一番ヶ瀬康子・津曲裕次（編）シリーズ福祉に生きる24長谷川良信（普及版）」『大空社』、2005
- 淑徳大学五十年史編纂委員会「淑徳大学 五十年史」『淑徳大学』、2015